

出エジプト記20章1-17節
ローマの信徒へ手紙7章13-25節
ヨハネによる福音書2章13-22節

本日の福音書は、一般的に「宮清め」と言われるお話です。四つの福音書すべてにあるお話ですが、マタイ（12:12-13）、マルコ（11:15-17）、ルカ（19:45-46）とヨハネではいろいろと異なります。マタイ、マルコ、ルカでは、福音書物語の後半部分、イエス様がエルサレムで本格的に活動を始められた頃にあるお話ですが、ヨハネは福音書物語の始まりのほうにあります。そして、ヨハネだけに「**イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた**」（ヨハネ2:15-16）と細かい描写があります。イエス様が神殿商人たちに語る言葉も、マタイ、マルコ、ルカは「**私の家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる**」（おそらくイザヤ56:7）ですが、ヨハネは、聖書からの引用ではなく、「**弟子たちは、『あなたの家を思う熱情が私を食い尽くす』と書いてあるのを思い出した**」と詩編69編10節の引用と思われる言葉を用いた弟子たちの応答となっています。そして、この敵対者たちの反応も、マタイ、マルコ、ルカは、イエス様への殺意の表明ですが、ヨハネはイエス様に対して、しるしを求める展開となっています。そして、イエス様から、「**この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる**」という言葉があり、「**イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた**」（ヨハネ2:21-22）と、最大のしるしが十字架の死と復活であり、弟子たちはそれを信じたと伝えるのです。これらの違いは、目的が異なるから生じたのでしょう。マタイ、マルコ、ルカは、イエス様が逮捕され死刑判決を受ける理由の一つに、神殿批判であったと述べているといえます。実際マタイとマルコでは、イエス様の裁判時証言の一つに、神殿に対する批判が触れられます（マタイ26:41、マルコ14:58）。ただし、その証言が決定的な証拠であったわけではありませんので、基本的な意図は、イエス様の活動の一つを伝えることなのでしょう。しかし、ヨハネの意図は異なります。弟子たちと福音書の読者が、イエス様を信じるためです。

違いについて触れましたが、共通している点もあります。それは、主なる神様への祈りの場であり、神と人間との大切な接点である神殿が、人間が人間を支配し、人間が人間から富を奪う組織になっていることに対して、イエス様が批判したことです。商売人たちを追い出すことを通して、その批判を行ったことです。一言でいえば、安定していた神殿の状態を不安にさせたのです。

話は少し変わりますが、「宗教」という現象について考え見ますと、それには、大雑把な見方になりますが、何かを安定化させる機能と不安定化させる機能があります。イエス様の神殿批判のお話は、主なる神様の名によって、間違った方向へと人々を安定化させていた神殿を、イエス様は不安定化させようとしたということです。そして、人々を主なる神様の愛に応える方向へと安定化へと導こうとしているのです。この見方においては、「**聖書とイエスの語られた言葉と**

を信じた」と明確に結論付けるヨハネ福音書のほうが、よりイエス様が何を求める安定化をより明確にしているといえます。既に与えられている『聖書（旧約と続編）』とイエス様の出来事を通して主なる神様を信じることであるからです。

さらに別な見方になりますが、本日のお話は、イエス様が唯一暴力的な行動をとったお話としても有名です。イエス様が、暴力（といっても屋台をひっくりかえしたぐらいですが、軽犯罪にはなるでしょう）を通して、神殿を不安定化させようとしたとも見る事ができるのです。このような暴力を用いた不安定化が肯定されるとき、そして、それが宗教的な行為として神の名によって行われるとき、歴史上存在した、そして今も存在する悲劇が発生するのだと思います。さすがに本日のお話を根拠に、自己の暴力行為を正当化する人はいないと思いますが、自己の行動の正当化の際に「それが今神様の求めていることだと思います」と、神様を軽く地上に引き下ろす表現は、時折あると思います。

イエス様は、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と語ります。その言葉は、今の神殿の間違ったあり方を壊し、イエス様の十字架と復活を通じた信仰によって、主なる神様の方を正しく向きなさいということを端的に示しています。それは確かに不安定化を目的としているのですが、単なる破壊ではないのです。物語の語り手が、「イエスはご自分の体である神殿のことを言われたのである」と注釈を語る通り、物語の登場人物たちは、現象の表面しか見ないため、何が起きているか理解していないのであり、また、神殿から利害を受けている登場人物たちにとっては、理解したくもないのです。それゆえ、イエス様はそのような人々を、ことに神を人間の地平に引き引き下ろした人たちの安定を批判したのです。ただし、批判するだけではなく、自己の十字架の姿を通して、主なる神様が想像された尊い存在として受け入れようとなさったのです。それがヨハネ福音書の示す信仰の内容です。福音の内容といってもよいと思います。主なる神様について気づかなかった人も、誤解していた人も、あえて間違っていた人も、十字架と復活の姿を通して信じた瞬間、主なる神様との正しい関係に入るといえることです。そして、そこから人と人の真の関係も築かれるといえることです。

本日の旧約日課は「十戒」です。その存在そのものが、『聖書（旧約と続編）』を代表して、主なる神様との正しい関係に導く道しるべです。しかし、人間の罪によって正しく機能しない歴史がありました。それゆえに主なる神様はもっとわかりやすいしるしをわたしたちに示された、それがイエス様の十字架と復活である、ヨハネ福音書は今もそう示しています。まだまだ人間による、人間に対する悲劇が続きます。いつ終わるのかもわかりません。ただただ、人間の視点ではなく、主なる神様の視点で、もっと良い形で一日も早く終わることを祈るばかりです。しかし、だからこそ、今も、イエス様がおられることを忘れないようにしたいと思います。そして今年も復活を祝うことを通して、そのイエス様を通して、神様の愛が示されていることを忘れないようにしたいと思います。そしてその愛を通して、本当の平和への道がいつでも示されていることを、今日も確認したいと思います。